




『三角級数論 / 陳建功著』(1930)

著者の陳建功氏は中国からの留学生で、東北帝国大学の大学院で藤原松三郎教授の指導を受けて三角級数論の研究を行い、1929年、日本における初の外国人留生理学博士となりました。そして陳氏を高く評価する、藤原教授の勧めによって書かれた本書『三角級数論』が、1930年に岩波書店より出版され、最先端の内容を日本語で書いた専門書として、大変重宝されました。関数論に関わる日本語のいくつかの用語は、この本の中で初めて用いられたと言われています。





陳建功 (1893-1971) (写真：東北大学史料館写真 DB より)

1893年、中国浙江省に生まれる。

1910年、入学した師範学校で数学に強い興味を持つ。

1913年、来日。当時の中国が工業の育成を急務としていたため、東京高等工業学校の染色科に入学したが、数学への志向が断ち切れず、東京物理学校の夜学にも通い、数学と物理を学ぶ。

1918年、東京高等工業学校を卒業。

1919年、東京物理学校を卒業後、帰国。浙江大学の前身校で染色工業関係の講義を受け持つ。

1920年、再び日本に留学し、東北帝国大学数学科に入学。「東北数学雑誌」に論文を発表。

1923年、卒業により帰国。翌年国立武昌大学の数学教授になる。

1926年、3度目となる日本留学で東北帝国大学大学院に入学。藤原松三郎教授の指導を受けて三角級数論を研究する。

1929年、理学博士を取得。日本における外国人留学生の学位取得第1号となる。その後9月に帰国し、浙江大学の数学教授となる。

その後の陳氏は、日中戦争や文化大革命などの悲運に巡り合い、必ずしも順調な研究者人生を送ることはできませんでした。しかし困難な状況下で出来る限りの優れた研究と研究者育成に尽力し、現在においては、中国現代数学の発展に大きな影響を与えた人物として、その功績が高く評価されています。

(参考：「[東北大学数学教室の歴史/佐々木重夫著](#)」本館書庫所蔵)

↑ [【MyLibraryより取寄サービス可】](#)